

エコツーリズムの理想と現実、問題点、 これからの展開に向けて

—先進地事例と佐世保市の現状と課題—

山 田 千香子

I. はじめに

エコツーリズムという言葉が聞かれるようになって久しいが、エコツーリズムの歴史はまだ浅く、その定義についても「日本はもとより国際的にもエコツーリズムに関する確立した定義がない」という現状である。そのため、逆説的な言い方になるが、エコツーリズムは様々な角度からの取り組みが可能であるといえる。

本論はエコツーリズムとは何かについて検討を加え、エコツーリズムの定義等の基本事項について確認をしたうえで、エコツーリズムの理想と現実、問題点等について考察する。そのうえで視察をしてきた先進地の取り組みとして、①屋久島、②斜里町（知床半島）、③神戸市、④バンクーバー市（カナダ）等の事例から佐世保市が学べること、そこから応用・援用できることを考えていく。次に佐世保市の環境状況や環境資源について述べ、佐世保市がエコツーリズム推進事業を展開していくにあたり、佐世保市にとって必要と考えられる施策について、佐世保市のなかの「離島への視点」も加えて述べていく。

Ⅱ. エコツーリズムとは

エコツーリズムとは、世界的な視点で概観すれば、自然保護や環境保全の観点から1960年代を中心に進めてきた先進国での資源開発とそれによって発生した環境問題への反省、途上国での急激な開発による自然破壊進行への危惧がある。一方ではそれに対する優れた自然地域の保全や保護のあり方として「地域資源をいかに持続的に利用していくべきか」を模索する流れと、「地域資源をいかに保護管理していくべきか」を模索する議論が活発化し、この論議を基礎として徐々に形成されてきたと考えられる。国内においては、1970年代以降の持続可能な開発に対する自然保護を推進するために必要な経済手段と、観光産業側からの取り組みという二つの立場からたどりついた共通の概念である¹。

国内的に徐々に関心が向けられ、エコツーリズムへの期待が高まっている背景には、観光やリゾートにおける志向の変化がある。パックツアーに代表される「周遊型」から、ゆつくりと旅をする、あるいは一つの場所に長く滞在して過ごす「滞在・滞留型」への志向変化である。リゾート法が制定されてから20年近くが経過した。2002年には「観光立国宣言」がなされ、観光が「国策」となってツーリズム振興が展開されている。一方、地域においては人口が年々減少し高齢化が進むと同時に、地域を支えてきた農林業などの構造的な不振により、地域の経済基盤が揺らいでいる。そして、この農林業の不振によって地域の自然環境も大きなダメージを受けている²。つまり、このような地域における社会経済面および環境管理面での構造的な閉塞状況の打開への期待と合致する動きとして、エコツーリズムは注目され、新たな社会システムとしての可能性に期待が寄せられているのである。

エコツーリズムでは、とくに、一般的な観光とは異なる「エコ」の部分のいかに扱うかが焦点となっている。エコツーリズムの核となるのは、この「エコ」の部分であり「生態的要素」である。この部分がなければ、単

なる観光になってしまう。しかし「エコ」に含まれるものは、単なる生態的要素ばかりでなく、自然と共生している人々の暮らしであり、その土地に密着した歴史や生活文化が地域資源となるのである。先進国では、あくまでも自然保護、環境保全を中心とした持続可能な観光のひとつの領域として展開されているが、日本型の特色は、エコツーリズム＝自然（歴史文化）体験・学習型観光の総称として、どちらかといえばツーリズムに軸足がおかれていることである。しかしながら、全国一律に同じやり方ではなく、推進地域独自の工夫と取り組みを活かしていくことが求められており、取り組む自治体の基本方針としての「地域づくり」がひとつの鍵となる。つまり、エコツーリズムは地域振興の選択肢の一つであり、先に、地域振興のグランドデザインがあって初めて採用される手段である。導入前に地域振興や地域の自然保護全体についての議論とグランドデザインが必要なことは指摘するまでもない。単なる一時的なイベントではなく、社会システムとしてエコツーリズムが位置づけられることが望ましい。

例えば、これまでの観光地づくりでは、外部の開発主体が利潤追求を目的として短期的に集客を目指すあまり、地域社会の意志とは関わりなしに「地域資源の商品化」を進めることによって、マスツーリズムに適した観光開発が為されてきた傾向にある。そのため、自然・文化・社会に影響を与え、長期的には地域資源の破壊、観光客の満足度の低下や住民の不利益の発生などの問題を引き起こしてきた。持続可能な観光の実現のためには、まちづくりの視点から観光振興や観光資源のあり方を考えていかなければならない。今日、このような観光は地域活性化に大いに役立ち、魅力ある文化の創造は、魅力ある観光地づくりにつながることから、エコツーリズムを推進・活用した「観光まちづくり」という考え方が注目されている。

Ⅲ エコツーリズムの理想と現実、問題点

1. エコツーリズムの理想と現実

1998年に設立されたエコツーリズム推進協議会は、エコツーリズムを「地域の自然・歴史・文化資源の保護」「地域固有の資源を生かした観光の成立」「地域経済の活性化」の3つの目的をともに成立させること、すなわち「観光産業と自然保護、地域振興の歩み寄りと融合のかたち」としてしている。自然環境保全の立場からの「自然保護」、観光業の立場からの「観光の成立」、地域の人々にとっての「地域経済の活性化」と、全てにメリットがあることがエコツーリズムの理想となっている。しかしながら、現実にはどの立場にウェイトをおいて推進していくのかが問われることになり、おのずと定義にも差異がでてくることになる。最終的に「地域資源の持続的利用」というのがエコツーリズムの理想であり、現代社会の課題といえる「持続可能な自然利用と社会の発展」と結びつく。しかしながらその理念は、ややもすると、目新しい旅行の一形態としてコマースリズムに組み込まれてしまいかねない。

エコツーリズムの第一の目的は地域の自然資源の保護と維持を実現していくことである。その実現には日常的にその自然と何らかの関わりを持つ地域住民が主体となり、積極的に関与することが不可欠である。そのためには持続的な自然の保護への関わりが、結果として地域住民の生活の一部として、経済収益が地域にもたらされることが必要となる。

エコツーリズムとは考え方であり、理念であり思想である。まず、何より、その考え方が当該社会で理解・共有され、共通認識として浸透していくことが望ましく、普及啓蒙活動が重要となってくる。

2. 「マスツーリズムのエコ化」推進の問題点と留意すべき点

佐世保市の場合には環境省の「マスツーリズムのエコ化」という採択のもとに事業が推進されている。エコツーリズムの対極にあるとされる従来のマスツーリズムでは、企画化や商品化が1960年ごろから振興し、旅行会社によるパッケージ化された旅行商品が一般的に利用されてきた。いうまでもなく、一度に大量の人間が送り出されるマスツーリズムは、これまで

観光地とその周辺に多大な悪影響を及ぼしてきた。環境汚染、コマースリズム、地域社会の伝統の崩壊、観光客のマナーの悪さや無知によるさまざまなトラブルも指摘されている。日本人の団体観光客のマナーの悪さが世界中で非難を浴びていたことは記憶に新しい。こういう諸問題からの反省として1980年代にマスツーリズムに代わってエコツーリズム、グリーンツーリズムなど一連のオルタナティブツーリズム (**alternative tourism**)、あるいは持続可能な観光 (**sustainable tourism**) と呼ばれる新たな形態が出現したという経緯がある。

しかし、エコツーリズムは、自然環境に影響を与える可能性がある観光の一形態であり、管理された状態で行なつてこそ、本来的なエコツーリズムの特性を発揮できる。もともと問題性がある観光をエコツーリズムとして美化する危険性も指摘されており³、地域のガイドライン抜きには、エコツーリズム本来の意義が失われ、自然環境や地域社会に大きなインパクトを与えることにもなりかねない。従つて、自然環境への負荷を最小限にするという前提が重要である。「マスツーリズムのエコ化」には、言うまでもなくそのような観光における「公害」とも呼べる負の側面を想定した上で、それらへの対応を十分に検討していくことが緊急に問われている。

さらに、地域において「資源利用適正化」問題を考えることと、「利用に関するルール作り」が、まず、何よりも先に求められ核となる部分をこのルールで定めていく必要がある。

IV. 先進地事例から学ぶこと

ここでは、これまで視察してきた先進地の取り組み事例について紹介していきたい。ここでは、先進地という言葉を用いているが、佐世保市自体も環境省のモデル地区指定に選出された13地区の一つであり、先進的な取り組みをしている「先進地」地域でもある。取り組みの時期から考えると、まず、世界自然遺産に登録された①屋久島と②知床半島におけるそれ

それぞれのエコツーリズム推進事業について、次に、佐世保市と同様に「マストツーリズムのエコ化」(環境省採択) 推進事業に取り組んでいる③神戸市について述べていく。さらに、世界のなかでも先進地と位置づけられる④カナダ(バンクーバー市等)の事例を取り上げ、佐世保市が学べること、そこから応用・援用できることを考えていく。まず、はじめに、エコツーリズムの活性化に大きな影響を与えている「世界遺産効果現象」から考えていくこととする。

1. 「世界遺産効果現象」と問題点

「世界遺産」とは1972年に採択された「世界遺産条約」において規定されている概念である。その内容は遺跡のような「文化遺産」と、自然保護区のような「自然遺産」とにわけられ、世界にある学術上顕著な普遍的価値を有する物件を後世に残し伝えることとしている。日本においては1993年に屋久島、白神山地の二地域、2005年に知床半島が世界自然遺産に登録され、2007年現在、「自然遺産」枠では以上の三地域となっている。

世界遺産として登録されることは、観光対象としての価値付けが世界的基準によってなされたことになるため、登録された後、多くの地域において世界遺産効果現象とも呼べる状況が見られる。つまり、観光対象としての価値が増大したことで、新たな利用者・観光客増大につながっているのである。しかしながら、それと同時に新たな問題にも直面している。たとえば、屋久島では利用者の増加による特定地点(縄文杉)への集中、知床半島では観光者の増加による登山道の複線化、野生動物への餌やり、海鳥営巣地への接近や追い回し、等をはじめとする遺産地域への影響問題が深刻さを増している⁴。世界遺産登録の際には「適切な管理が行なわれていること」が審査対象となるため、事前に適切な利用管理が計画されていなければ登録は難しいが、実際にはその計画に想定された以上の問題が引き起こされているのである。

「文化遺産」の事例では、岐阜県白川郷荻町(合掌造り家屋)のケース

が注目される。観光協会によれば、1995年に世界遺産に登録されたこと
によって一日平均300台の車が来るようになり、1日に全人口の1.7倍に相
当する3500人の観光客が訪れるようになった。白川郷は合掌造りの特殊
形態から景観を含む町並み保存が行なわれたため、荻町中心に年間100万
人を越える観光者を受け入れるが、観光者増加に際してゴミ投機の問題、
観光定められたルート以外の民家やプライベートな空間に侵入するといっ
た訪問者マナーの問題が深刻化しつつある。町並み保存によって地元住民
の生活自体が文化観光として見物対象となるということから派生している
問題でもある。荻町では観光者の増加によって観光収入が増加し、「まち
づくりには成功した」ものの、以上のように環境面や住民のプライバシー
の問題が多数の観光者により、脅かされる結果を招いたことが指摘されて
いる⁵。

2. 屋久島の事例（自然体験型観光のエコツアー）

視察日：2006年2月11日～14日

屋久島は1993年に世界自然遺産に登録されている。ここでは、世界遺
産登録後と屋久島の現在の状況について視察後の感想も交えた上で考察し
ていきたい。

屋久島の特色は、縄文杉を頂点とする豊かで生命力溢れる自然である。
その自然の雄大さについて視察した感想を述べるならば、適切な言葉を見
つけられないほどの深い感動を抱かされるものであった。「世界遺産」と
いう価値の重みを改めて実感させられる自然環境である。ヤクスギランド
や白谷雲水峡で印象的であったのは、遊歩道がきれいに整備されているこ
とである。遊歩道整備によって、美観が保たれるとともに、観光者の行動
への規制にもつながっており、自然への対応兼マスツーリズム対応がうま
くできていると感心し、望ましい自然への第一歩が守られているように感
じられた。

しかしながら、ガイドツアーによる植生破壊やガイドの質のバラツキな

どの問題も生じていることが、ヒアリングによって明らかになった。屋久島の生活の基盤は農業と漁業である。遺産登録後、林業において伐採は全面禁止となる。営林署は縮小され、人員は補充されなかった。いわさきホテルグループへ土地が売却され、その後30~40年経過した後ホテルが出来上がった。しかし、ホテル側と地域とのコミュニケーションがとれていないため、活性化が図れない現状にある。受け皿の施設不足ということは明らかであり、観光客がフェリーを使って一日20台ものバスでやってきても、その日のうちに(17:00のフェリーで)引き上げていくため、地元には何も落としていかないという状況である。

自然資源を観光利用するに当たったのルールづくりや、質的に一定基準を満たすガイドの人材育成体制づくり、保全地域や観光対象自然環境地利用状況の情報提供の取り組みが、早急に求められている事項である。佐世保市においても、今後、同様の取り組みが必要となると考えられる。

3. 知床の事例(自然体験型観光のエコツアー)

視察日: 2006年7月29日~31日

知床を事例として考察する場合、大きな特色として挙げられるのは、ほぼ20年前に地元の斜里町が中心となって設立した知床財団と、財団が運営している知床自然センターの存在である。この財団の活動は環境保全やエコツーリズム推進事業においてひとつのモデルとなっている。知床財団の推進事業としての特色は、①自然解説、②調査研究・解説事業、③100平方メートル事業等である。野生動物ヒグマなど知床特有の自然の調査・研究を行なう一方で、これらの研究や調査から得られた知見を元に、事業として一般の観光客向けに、エコツアーのプログラムを開発・提供している。また、平成19年度からは、環境省のモデル事業としての受け皿、支援機関となって、斜里町、羅臼町の両町にまたがる組織としてかかわり、エコツーリズム事業を行なっている。この財団の活動がきっかけとなり、エコツアーをビジネスとして立ち上げる若者が増加してきている。また、

世界遺産登録効果現象も大きく、観光客の伸びとともに他地域からのガイドの増加傾向が見られる。

この知床におけるエコツーリズムの特色は、マスツーリズムとエコツーリズムの融合を図ろうとしていることである。斜里町ではマスツーリズム観光をベースとして大型化してきており、とくに航空機と結びつけた「割引」導入によって、7・8・9月のピーク時期は一日5000人収容施設がほぼ満室になるという状態が続いている。大手の旅行業者が企画したパッケージツアーには、環境保全の立場から自然ガイドが乗り込み、バスガイドとは別に知床の自然解説も行なっている。秋・冬・春に観光客を増やそうとの試みをはじめ、最近では地元の漁師による冬の流水体験ツアーが企画され、人気となっている。その一方で「海を豊かにするための漁民による植樹運動」も実施されている。

知床財団の資料⁶によると知床半島では、観光客の増加とともに登山道の複線化、野生動物への餌やり、海鳥営巣地への接近や追い回し、騒音による海鳥繁殖への影響等が懸念されている。また、マイカーやレンタカーによる路上駐車も倍増している。知床半島においても、屋久島の事例と同様に自然資源を観光利用するに当たってのルールづくりや、質的に一定基準を満たすガイドの人材育成体制づくりが求められている。

4. 神戸市の事例（マスツーリズムのエコツアー）

視察日：視察日 2006年3月15-16日

神戸市のエコツーリズム事業への取り組み概要は以下の通りである。視察時のヒアリング内容を中心として考察していくこととする。

大都市の裏山である六甲山は圧倒的な大自然ではないところに特徴をもち、交通網が整備され、展望中心のマスツーリズムで発展してきたが、大震災以降、入りこみは伸び悩んでいる。この打開のために、NPO団体や事業者などによる地域資源を活用したプログラムが展開されている。市民参加による質の高い利用の推進等、都市近郊の国立公園として、エコツー

リズムに基づいた利用のあり方を検討している。とくに、公共交通機関の利用を促進しマイカー利用を抑えるための取り組みが特色のひとつである。

<神戸市の特色ある取り組み事例>

①公共交通機関の利用促進：エコ割制度や「エコツーリズムバス」の運営

この企画が実施された背景には以下のことが挙げられる。神戸市は公共機関が整っているけれども（ケーブル・ロープウェイ等）、9割がマイカーの時代であり、「バスの事業者は東京でのみ成り立つ」という具合で事業者は軒並み経営が苦しい状況にあった。エコツーリズムの推進とともに、「不必要なマイカーを減らしていこう」を目標に設定した。子供時代の経験は将来へつながり将来の乗客となると予測されることから「原体験づくり」をキャッチフレーズとしたものである。成果としては（前年比）17.1%の乗車数増加が見られた。

②多種エコツアーの開催

③新しいイメージづくりの成功(逆転の発想による新規入り込み客の獲得)

多種のエコ・イベントを開催した。資源の再発見、他所にないものをいかに作り上げるかを、第一に考え、●発見する、●使う、●みがき直す、をひとつの手順とし、従来は観光推進にとってマイナスと考えられてきた事象（雨・霧、冬の寒さなど）を、それも地域の特性の一つとして利用することで新たな入り込み客の獲得に成功した。

具体的には、1)「夜景」の再ブランド化によって観光客を滞在型観光へ向けた。2)「Mt 摩耶星と光の祭典」を開催し、掬星台には星の光・街の光が融合するような設定にし、足下の「光る遊歩道」はとくに若い人々に評判となった。次の仕掛けは、3)「六甲山水の祭典」開催であった。上記の催しは、結果としていろいろな事業者に刺激を与え、良い成果とつながっている。

<神戸市の次なる取り組み事例>

①ムック本の作成案：現在、「山と溪谷社」へ依頼中であるが、「エコツーリズムパス」（割引クーポン：単なるクーポンではなくおみやげに仕立て上げられるような構想）を作り上げて販売していこうと計画中である。

<神戸市の問題点>

現在、エコツーリズムの取り組みと実施体制は、組織としてまとまってきたが問題は「人」がいないことである。エコツーリズム母体組織としてあるのは「六甲・摩耶推進協議会」のみで財源もないため、自治会のように基金集めが必要となっている。自己財源をいかに作り出すかについても重要である。推進母体がしっかりすることが第一であろう。次に事業を進めるうえで重要なのは「組織」というよりも、「人」である。推進役の確定が大切で、自分の利益のみではなく、推進に向けて動かすことのできる人が重要で「ヒト、ヒト、ヒト」である。地域の協力体制も重要であるが、阪神地域は「けち・無駄・危険なことはしない保守的土地柄」で、もうかるエサを提示しないとついてこないという特色を持っている。

「有馬地区との関連について」：有馬地区はこれまで神戸観光を引っ張ってきたトップランナーであったため、六甲・有馬地区としての観光には目を向けてこなかった。今後、エコツーリズムとの関連で、どう推進していこうかと目下思案中である⁷。

神戸市六甲・摩耶・有馬地区を視察して、これらの地域の自然が保全されたのは地理的、立地的に人間の手ではこれ以上開発ができない地形という厳しい条件下にあるため、その結果、幸運にも残されてきたという印象を抱いた。神戸市は大都市の傍にある恵まれた自然を資源としてフルに活用している。「エコツーリズム」推進において軸足が「エコ」か「ツーリズム」か、と考えた場合、神戸市の場合は明らかにツーリズムに重点がおかれているようである。

保全に関する取り組みでは、「エコパス」という公共機関利用促進の取

り組みが注目され、その活動から派生している「『エコツーリズム』という用語の浸透」とその取り組みによって、エコツーリズム推進についての市民啓蒙がかなり成功しているようである。なお、六甲地区ツーリズムの「仕掛け」は精力的であり、そのアイデアや発想はひとつひとつが成功しているだけに、高く評価できるものであった。今後、単なるイベントで終わらせないためにも、「市民が楽しみに待つ冬の行事」として定着していくことが望まれ、継続的な取り組みが期待されている。

5. カナダの事例 (自然体験型観光のエコツアーの一例)

視察日：2006年10月11日～16日

エコツーリズムにおいて世界的にも先進地とされるカナダの場合は、どの地域を取り上げて、圧倒的な大自然の魅力が挙げられる。さらに、それだけではなく先住民のユニークな文化などをエコツーリズムという手法で楽しく見せ、世界からの旅行者を呼び込んでいるのが特色となっている。つぎに、報告者が偶然に参加することとなったBC州における「サーモンツアー」について、感想を含めて紹介したい。

BC州の中央部に位置するアダムズリバーでは、毎年、10月の中旬になると10日間近くに亘り鮭の遡上が見られる。今回は4年に一度という周期で大量に遡上する豊漁の年ということで、期待度も高まっていた。黄色を基調とするカナダの広大な秋風景の中に、これも広大な川を「サカイ」という種類の鮭が真っ赤に埋め尽くす光景は圧巻である (掲載写真)。

この鮭は海から川に戻って真水に洗われるほどに赤みを帯びていくという特徴を備えており、観光スポットとなっている場所から観ると「緋鯉」と見間違ふほど真っ赤であった。その場に居合わせたツアー客一行からは、到着するやいなや歓声が一同に沸いたほどである。歴史的に多くの日本人移民をカナダへ引き寄せる発端となったのがこの光景であり、そこから日本人に關係する興味深い歴史的な出来事につながっていくことが思い出された。少し離れた場所へ車で移動すると、この地域に居住する先住民のシ

ユスワブ族についての展示説明や族長による「部族についての語り」を聴くことができるように構成されていた。環境の質の高さによる感動も含めて、参加者の満足度は高いものとなっていた。

最終的に目指すべき段階は、当該の自然環境が大自然であろうとなかろうと、地域全体で環境の質を上げることに取り組み、同時に旅行者の体験の質を向上させることで旅行の付加価値を高め、高収益を確保するような高品質のツーリズムの提供ができるようにすることであろう。「環境の質を高めることが環境を売り物にするツーリズム産業の質を高め収益性の向上にも資するというのがエコツーリズムの目指すべき到達点である⁸⁾」と言えるのではないだろうか。



カナダ・BC州アダムズリバー上流における鮭の遡上光景（2006.10.12 山田撮影）



V. 佐世保市の環境とは一地域資源について

1. 地域資源としての自然環境

ここでは、佐世保市周辺の（自然環境を中心とした）環境視察を通してその中から、何が「地域資源」として提示できるかについて具体的に述べていきたい。中心的な地域資源である九十九島については他の報告者が言及しているので、本報告では省くことにする。

視察日 2006年3月21日

視察地 国見山周辺…県内最長の佐々川源流およびアカガシ原生林
大山祇神社の社叢（県天然記念物）、森林植生

北川内川（佐々川の支流）、沢登りコース、農村里山風景
佐々川流域（吉井町ポットホール公園）

浅子（長浦地区、二本松地区）、海岸線、佐々川河口

案内ツアーガイド：川内野善治氏（佐世保市自然の会）

(1) ガイドの重要性について

今回の視察では、佐世保市周辺の自然環境に対する知識がなかっただけに、川内野氏による5地域への案内は実に新鮮であり、保全されている自然環境の美しさや日本の原風景と考えられる光景に目を見張る思いであった。しかし、こうした気づきは、名ガイドの知識と説明があったからであり、ガイドの重要性を痛切に感じた次第である。

(2) ツーリズムからみた商品として

- ① (山) 国見山：「アカガシの原生林」と「佐々川の源流」
- ② (川) 北川内川（佐々川の支流）：人間の手によって「保全されている里山環境」
- ③ (海) 浅子：「海岸線の美しさ」と「残されている明治時代の生態系」

以上の、3地域はそれぞれ佐世保エコツーリズムの目玉となるプログラムの対象候補として挙げられる。しかしながら、多くの観光客が入れば入るだけ、明らかに劣化していく自然地域である。せつかくこの時代まで良い状況で残されてきた上記自然環境であるから、今後も劣化させることなく、良い状態で次の時代まで引き継いでいかなければならない。そのためには、観光客をどのように受け入れるか、どのあたりまで、エコツーリズム対象地域として公開していくか等、エコツーリズム基本枠組みやルールづくりについて、深く検討されなければならない。

徹底した保全を考えていくなれば、はじめから公開せずに対象地区からはずしておく必要がある。そのような選択肢も考慮した上で、佐世保市の環境とエコツーリズムについて検討していくことが求められる。

2. エコツーリズム対象としての「離島への視点」

佐世保市に属する離島のなかで、ここではエコツーリズムの対象として、「黒島」と「宇久」を事例として考えてみたい。

(1) 黒島を中心として

黒島は、九十九島（西海国立公園の一部）の中で一番大きい島として位置している。歴史的にキリシタンの島として知られており、現在でも佐世保市における観光スポットとして注目されている。現在、黒島は「長崎の教会群を世界遺産にする」運動のなかで、教会群のひとつとして挙げられていることから、今後、佐世保市が対応していかなければならないのは、前述したような「世界遺産登録効果現象」を念頭においた受け入れ態勢である。

①観光における地域文化提示の内容の検討

観光対象は「黒島教会」という建築物であっても、これまでその建物が維持されてきた歴史的背景、さらには自然環境、島の中心的宗教であるキリスト教というように、「現在の島民の生活・暮らしのあり方そのもの」が「生活文化」として、来訪者の関心を惹き付けることになると考えられる。その際に、白川郷の事例のように「まちづくり」として、「生活文化提示」を受容して積極的に取り組んでいくのか、あるいは、観光対象を教会の建物のみとして島民の生活と切り離して考えるのかによっては、全く異なるものになっていく。仮に、教会のみとして設定したとしても、多くの観光者を迎える過程で、島民の生活がさまざまな状況で巻き込まれることになると想定できる。日常生活の場である島が「生きた文化」として価値付けられることによって、地元民にとって「住みやすいしま」ということに不安定要因をもたらすのであれば、一番大切にしなければならないものは一体何か、ということの検討から始めるべきであろう。

どちらにせよ、受けいれる基本的あり方からガイドラインに至るまで、島民とともに納得行くように創りあげていかなければならない。まずは、島民と自治体を中心としていくつかのプランを創りあげていく必要がある。選択の方向性によっては、具体的に観光客受け入れ態勢の準備（状況によっては一日の島への上陸者数・利用者数の上限を考える必要がある）

が想定される。

黒島を対象として考える場合も、大切なことはより多くの地域住民が資源価値を深く認識していくプロセスの形成である。郷土意識を育成していくためには、より多くの住民が地域の資源の価値について十分に認識することが出来、かつその認識が普及していくようなプロセスの構築が必要である。

(2) 宇久を中心として

基本的に黒島の場合と同様であるが、宇久町においては「地域資源」として、何を全面的に打ち出していくかということである。報告者が考えられるのは「酪農との関連から」「神の浦の整備：入江は古来から利用され発展してきた歴史をもっていることから観光スポットとして整備していく価値があると考えられる」「既存の自然景勝地の整備」「『平家』の歴史の検証と整理」「郷土祭りの再現と観光化：ひよひよ祭り等から」「豊かな海の幸を活用した郷土料理」「島全体を癒しや健康づくりの休養地、保養地として捉えていく」等であるが、やはり、あれもこれもではなく内容に一貫したものが求められる。それには、外部者の意見よりも、まずは、次のような手続きのもとに、地域住民の活動が求められる。そのグループに、外部者数名（島出身者で現在は島外での生活者・郷土史家や生態学者等の研究者等）が加わることで、客観的な視点を取りいれることができるのではないだろうか。

以下に、その取り組み手続き過程を紹介したい。

1) 宇久町地域資源の発掘へ

地域資源の発掘には手順をしっかりと踏まえて取り組まなければ、観光まちづくりに役立つものとはならない。地域資源を発掘するための基本的な手順は次のようになる。

I. 知る (各地の事例研究と地元の歴史認識)

- 1、全国各地の事例を学ぶ。
- 2、郷土学習への取り組みをする。
- 3、資源発掘の方法を学ぶ。



II. 掘り起こす (地域資源の価値の再発見)

- 1、資源発掘の課題を検討する。
- 2、課題をもって地域資源を発掘する。
- 3、お互い連携し、協力し、参加することで新しい発見をする。



III. 整理する (地域資源の体系化)

- 1、地域資源の整理と整頓
- 2、地域資源の分類と評価
- 3、地域内の分布図づくり

出典：二瓶長記『このままではもったいない！みんなで創る観光まちづくり実践塾』
2006年

まず、地域資源をどのように発掘し活用しているかを全国各地の事例から学ぶ必要がある。しかし、情報が氾濫しているゆえに先進事例の表面だけにとらわれ、その事例の取り組みの理念や姿勢を見落としてしまう。先進事例を見ると、その成功要因だけを学ぶことが重要であり、決してそのまま真似をすべきではない。

そして地域資源を発掘するには、郷土学習が必要である。具体的には、道路や公園、文化施設など、いわゆるハコモノづくりに特化してきた地域づくりを見直すことはもちろんであるが、自然環境や地域特有の風土に根ざした農林漁業、地元で代々伝わる「技」、またその技によって創り出される「モノ」、伝統的な「食文化」や「芸能」、さらに「民話・伝説」など

を含めた、古くからの生活文化をもう一度見直し、新たな時代に適応した暮らしづくりに実践的に取り組むべきである。

資源発掘の課題は、自分たちの地域にとって今何が求められているかを考え、取り組めるテーマを設定する。たとえば「観光振興」や「産業振興」、「文化振興」といったテーマや、さらに詳細に分ければ「環境保全」や「人材育成」なども考えられる。これらの課題をもって資源の掘り起こしとリストアップをおこない、まとまったら地域資源のある箇所に行き、自分の目で確かめることが肝心である。これら一連の作業は、一人ではなく何人かがグループとなっておこなうことで、思いもかけない発見があったり、新鮮な発想が生まれたりすることがある。

最後に、発掘した資源を整理し、資源の種類ごとに分類して、これらを地域の地図上に分布図を作成する。こうすると、地域内のどのあたりにどのような資源が存在するかがわかり、資源と資源を結びつけた観光ルートの開発などにつなげることができる⁹。

VI. おわりに

これまでのエコツーリズムに関する内容をまとめると以下のような項目があげられる。

地域資源の持続的利用のためには、①自然環境や地域資源の状態を把握する必要がある。対象の状態がわからなければ、②利用のガイドライン作成や規制はおぼつかないからである。さらに③状態の把握は恒常的なものでなければならず、その知識の蓄積が必要である。つまり、④地域の自然環境を対象とした研究活動が行なわれる必要がある。それは⑤常設の研究機関によって行なわれ、得られた知見や研究結果を蓄積できることが望ましい。そして⑥その蓄積がエコツーリズムの管理、あるいは目的地の自然環境や地域資源の管理に利用されることになる。⑦得られた知見や研究成

果をもとに、来訪者や地域住民に自然環境や地域資源についての学習機会が提供される。この場面では、⑧インタープリターや環境学習施設が活躍する。また、自然環境を見直す機会を作り、⑨「日常」に埋没してしまった自然環境の価値を地域住民が再認識できる機会をつくりだす効果もエコツーリズムにはある¹⁰。

最後に、佐世保市への提言事項を列記し、上記項目とも関連させながら説明を加えていくこととする。

＜提言事項＞

1. 佐世保市の希少環境保全地域の特定、およびツーリズム推進可能地域環境の特定化

2. 地域資源の特定と価値付け

住民にはさほど認識されていなかった資源の価値を専門家や研究者によって認定されることにより代表的特徴を持つ。

3. 「質の高い」エコツアーガイド養成への提案

- 1) 佐世保の自然・歴史・文化、保全および安全管理に対する基礎知識の理解促進。
- 2) ガイド養成の研修制度、認定制度の構築
- 3) 佐世保独自のエコツアー・プログラムの研究・開発
- 4) 観光資源に関する基礎知識ガイドブック等の開発
 - ・ガイドブック・データブック・自然歩道ガイドマップ・自然を守るためのハンドブック・ウォーキングマップ・観光用DVDの制作等

4. 市民に対するエコツーリズムの思想の普及と啓発

エコツーリズムの考え方を地域全体が共有することが見落とされる
と、時として個の経済的利益の偏重に陥り、社会全体の将来にわたる
メリットが見失われると考えられるためである。

5. 周辺住民を観光客としての新規獲得

外部からの観光客誘致という発想ばかりでなく、神戸市のように、
イベント等を通して、地区を取り巻く周辺地域の住民を新規観光客と
して獲得につなげることが重要であろう。佐世保市の住民であっても
佐世保市を知らないことは多く、「佐世保新発見」につなげていけば、
外部からの観光客のみならず、彼らこそ、佐世保市応援・支援リピー
ターとなる可能性を秘めているのである。

6. エコツーリズム客に対応する交通機関の開発と確保（エコバスの 導入の検討等）

「利便性」から考えると佐世保市の公共交通機関の現状は十分では
なく、逆に日常生活においても不便な状況ある。神戸市の取り組み事
例「公共交通機関の利用促進」のように、不必要なマイカーを減らし
ていくことは重要であり、今後、一番力を入れて対応を考える必要が
あるのがこの項目であろう。

エコツーリズムの根源的な課題は「持続可能性」であろう。私達が生活
している、暮らしている、つまり、生きているというよりも生かされてい
る私達の基盤環境としての「地域」、その地域環境を持続可能にするには、
まず、地域環境保全への取り組みが第一として挙げられる。地域ごとの保
全仕組み（ルールづくり）が確保されて、初めて、それらを対象資源とす
るエコツーリズムの活性化が推進されるべきである。エコツーリズムを推
進し持続可能な事業にしていくためには、そのような前提条件抜きには考

えられず、事業担当者および市民の意識の共有、共通理解が求められる。

さらに、次の段階として、環境資源をエコツーリズムと結びつけて考えていくなれば、対象環境（資源）を特定化していく必要がある。むやみやたらに、あれもこれもという環境選定や切り売りをするのではなく、希少環境保全地域と観光資源として提供できる地域の区分けは必要であろう。「提供できる資源はここまで」（対象としての環境価値を見極めることが明らかに重要である）という基準を明確にする必要がある。環境の劣化を防ぐためにも、その枠内でのエコツーリズムに留めることが必要とされる。

そして、現段階で何より重要なのは、佐世保市の環境現状把握と環境認識の構築である。「自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること」が、エコツーリズムの課題であるが、そのなかで、佐世保市の重要資源と位置づけられるのは、一体何なのだろうか。これまでの調査から、その答えは明らかに佐世保の「自然環境」と言える。（文化や歴史をポイントにするならば海軍基地としての歴史やそれに付随する近代化遺産としての建造物、そして現在につながる「米軍基地」との共存という特色が挙げられる。基地と地域の関わりがまず佐世保の特色であり、逆にその側面を無視することはできない。）

どういう自然環境資源が存在し、現在、どういう状態であるのか。仮に、エコツーリズムとつなげるのであれば、それはどのような価値を有し、どのように位置づけられ説明されるものなのか、さらに、どのように「商品化」できるのかについて十分な議論と検討が為されるべきである。

佐世保市におけるエコツーリズムの推進はようやく始まったばかりである。今後も試行錯誤を重ねる中で、より望ましい「地域資源の利用」のあり方を模索していかなければならないだろう。

(注)

- 1 真板昭夫「エコツーリズムの定義と概念形成に関わる史的考察」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』国立民族博物館調査報告書第23号(2001)、pp.15-40
- 2 下村彰男「社会システムとしてのエコツーリズム」『科学』Vol.72.NO.7.2002 p.711
- 3 太田好信「エコロジー意識の観光人類学：ベリーのエコツーリズムを中心に」石森秀三編『観光の20世紀』1996. pp.207-222
- 4 屋久島、知床半島視察時のインタビューから。
- 5 中村純子「観光における地域文化提示の問題と『文化』の創造」地域産業文化研究所『ツーリズムの競争力強化に向けた産業的対応』2004年、p.80
- 6 知床財団「知床の世界自然遺産登録前後における観光利用の変化と課題－知床国立公園利用適正化検討会議作業部会参考資料」2005.12.6
- 7 2006年3月16日、神戸市観光交流課境氏へのインタビューより。
- 8 小林英俊「日本型エコツーリズムの可能性とビジネスのあり方」地域産業文化研究所『ツーリズムの競争力強化に向けた産業的対応』2004年、p.102
- 9 二瓶長記『このままではもったいない！みんなで創る観光まちづくり実践塾』長崎出版、2006年、p.118
- 10 敷田麻美・森重昌之・新宏昭・佐々木雅幸「エコツーリズムの発展過程と構造モデル」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』国立民族博物館調査報告書第23号(2001)、pp.111-128

<参考文献>

太田好信「エコロジー意識の観光人類学：ベリーのエコツーリズムを中心に」石森秀三編『観光の20世紀』1996. pp.207-222

小林英俊「日本型エコツーリズムの可能性とビジネスのあり方」地域産業文化研究所『ツーリズムの競争力強化に向けた産業的対応』2004、p.102

敷田麻美・森重昌之・新宏昭・佐々木雅幸「エコツーリズムの発展過程と構造モデル」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』国立民族博物館調査報告書第23号(2001)、pp.111-128

下村彰男「社会システムとしてのエコツーリズム」『科学』Vol.72.NO.7.2002 p.711

長崎県立大学論集 第41巻第4号 (2008年)

中村純子「観光における地域文化提示の問題と「文化」の創造」地域産業文化研究所
『ツーリズムの競争力強化に向けた産業的対応』2004、p.80

二瓶長記『このままではもったいない！みんなで創る観光まちづくり実践塾』長崎出版、
2006、p.118

真板昭夫「エコツーリズムの定義と概念形成に関わる史的考察」石森秀三・真板昭夫編
『エコツーリズムの総合的研究』国立民族博物館調査報告書第23号(2001)、pp.15-40

<参考資料>

知床財団「知床の世界自然遺産登録前後における観光利用の変化と課題－知床国立公園
利用適正化検討会議作業部会参考資料」2005.12.6